図書紹介

田中統治・根津朋実編著
『カリキュラム評価入門』

角　替　弘　規※

一般に入門書とは，何かを学ぶスタートにおいてこそ真価を発揮する書物であると考えられているかもしれない。筆者も，初めて質問紙調査を行おうとした時に，図書館に赴き，『調査法入門』と題された本を何冊も手に取った経験がある。その結果，確かに調査がどのような手続きを経て行われるのか，どのような方法が用いられるのか，その概要については理解できたのだが，いざ自分で質問紙を作る段になると，今ひとつピンとこない。本に書いてある通りの手順で質問紙を作り，データを収集し，一通りの分析をしたにもかかわらず，やはりしっくりこない。そこで，改めてもう一度入門書を読んでみる。その時になって漸く自分の問題点や課題に気づかされる。そのような経験はないだろうか。困った時や分からないことがある時に立ち戻り，方法の基礎基本と自らの手順を確認する。入門書とはそのような使い方をする本ではないだろうか。したがってその真価は，入門時点よりも入門した後であればあるほど発揮されるものであると筆者は考えている。

そのような観点から言って，本書はタイトルそのままに，まさにカリキュラム評価の入門書である。その編集意図は，学校関係者からの「そもそもカリキュラムをどう捉え，どう評価すればいいのか」という問いに答えることにあるとされている。理論と方法を簡潔に示し，豊富な事例を含みつつも全体としてはコンパクトにまとめられた本書は，その意図をほとんど達成しているのではないだろうか。あとは読者がここから何を学びとるかに委ねられているだろう。

本書は大きく分けて理論編と実践編から構成される。「第一章　カリキュラム評価の必要性と意義」と「第二章　カリキュラム評価の理論と方法」が理論編に該当する。その後，カリキュラム評価の具体的な実践事例や調査研究についての各論（＝実践編）が続く。具体的には，「第三章　小学校英語カリキュラムの評価」，

※桐蔭横浜大学

「第四章　カリキュラム評価の常態化」,「第五章　授業評価を起点としたカリキュラム評価」,「第六章　中高一貫校のカリキュラム評価」,「第七章　選択教科・科目制カリキュラムの評価」,「第八章　特別支援学校のカリキュラム評価」,「第九章　小中一貫教育のカリキュラム評価」,「第一〇章　生涯学習プログラムの評価」,「第一一章　脳科学の成果を応用したカリキュラム評価」,「第一二章　教師教育のカリキュラム評価」,「第一三章　民間団体教育プログラムの評価」という構成である。

以上のような構成からも明らかな通り，本書で扱われている内容は小学校から生涯学習や民間団体プログラムにわたる多様な領域と対象を含み，多くの事例と方法が取り上げられている。したがって，様々な教育現場においてカリキュラム評価に関わる実践者がこの書を手にすれば，読者は多くの事柄を学ぶはずである。しかし同時に,「では私たちはどうすればいいのだろうか」と，困惑もするだろう。おそらく読者のほとんどは各論において取り上げられた事例にピタリと当てはまることはないだろう。例えば「外国人集住地域における中学校の多文化共生カリキュラムの評価をどうしたらいいか」という疑問を持つ読者が本書を読んでも，そのものズバリの答えが示されているわけではない。それは読者が実際に試行錯誤を繰り返しながらカリキュラム評価に取り組みつつ，本書の様々な部分を読み返しながら学んでいくことになろう。しかしカリキュラム評価を行うに当たっての要諦は明確かつ一貫して示されている。以下にごく簡単にまとめておこう。

一つは目標の明確化である。何のために評価を行うのかが明確でなければ，一連の活動は評価のための評価に陥る可能性がある。特に組織的に行われる評価活動は,「お仕事」になってしまう可能性が高い。評価を行う当事者はそのことを肝に銘じなければならない。

二つ目には実態を客観的に把握することからすべてが始まるということである。このことは PDCA から CAPD への転換という点にはっきりと示されている。目の前で生起している事態をありのままに観察・記録・分析するということは，簡単なようでいて実は極めて難しい。特に教育関係者にとっては尚更のことではなかろうか。しかしこのことにより，私たちの認識が根底から覆される可能性を大いに秘めている。

三つ目にはカリキュラム評価という一連の過程において対話が極めて重要な意味を持っていることである。資料を収集し，分析し，問題点を洗い出し改善策を

探るという一連の過程は，決して個人の作業において完結するものではない。すべては複数の人々の開かれた議論を前提としている。当然そこには当事者の主体的な姿勢がなければならない。

その他にもカリキュラム評価を行うに当たってのポイントは多々示されているが，読者自らがそれぞれに抱える課題を，本書に示された多くの実践例を比較しながら，そして理論編における説明を繰り返し読み解きながら，読者自身が試行錯誤しながらカリキュラム評価を進めていく，そんな使い方がなされたときに本書の真価が発揮されるはずである。

一点，筆者が感じた物足りなさを敢えて指摘するとすれば，理論編の「薄さ」である。特に方法論についてもう少し詳細な説明があっても良かったのではないかと思う。カリキュラム評価を行っている（行おうとする）読者のうち，社会調査の経験のない人にとっては，むしろその部分を一番知りたいと思うのではなかろうか。

田中統治・根津朋実編著『カリキュラム評価入門』

勁草書房，2009年，2,730円